

学校自己評価書

奈良学園小学校

※網掛け項目＝今年度重点取り組み項目

大項目	中項目	小項目	具体的評価項目及び指標	取組と成果	評価	評価の観点・理由	課題及び改善方針
I 教育活動に関するもの	(1) 教育目標・教育計画	① 教育目標の設定	②中期計画による取り組みの重点を示し、各教科や学年において今年度の具体的な取り組みにつなぐ教育計画を立案する。(教育計画作成の有無)	②④中期計画でたてた目標に向け、各学年や教科で計画を立て、その進捗管理を学期ごとに行い、学校全体で共有した。進捗確認時に、取り組みを進めるうえで必要な修正を行うことで、各学年や教科の目標に近づけることができた。	A	②各学年や教科、分掌担当で年間の取り組み計画を立てることができた。 ④各学期ごとの進捗管理を行うとともに改善に向けた調整も実施した。 保護者アンケート項目「学校は児童に適切な教育活動を行っている」に対して肯定的な回答の割合は98.3%であった。	・新型コロナウイルスへの対応は、常に意図した教育活動として行っていく必要がある。次年度、計画段階で位置づけた対応について検討したものとすることが必要である。 ・GIGA School構想が動く中で、中期計画においては学びの変革を進めており、特に、探究活動や個別最適化された学習について、次年度よりバージョンアップした年度当初の計画としていくことが必要である。
		② 教育計画の作成	④作成した教育計画の進捗状況を各学期毎に確認・改善し、目的に向けた取り組みを具現化する。(保護者アンケート結果80%以上)				
		③ 教育課程の編成					
		④ 教育活動の評価					
	(2) 教科指導	① 学習指導計画の立案	①国語科において説明文を重点に取り上げ、要点→要約→要旨を系統的に指導するために系統表を作成・試行する。 ①②③国語科・算数科を中心に単元を調整し、反転学習の実施計画の作成・試行をする。	①②③については、年3回の公開授業を通して、説明文の分野で実践を行うことが出来た。また、国語科を中心に系統表の作成を行い、各学年で身につけなければいけない文法や要約のやり方についてまとめた。夏に校内の研修会を開き、全教員で共有した。算数科を中心に反転学習の実施計画を作成・試行した。計算領域ではパターン化されたものは予習として扱うことで、授業内での反復学習の時間が確保できるメリットがあった。また、教科部会を活用し、反転学習の効果について検討した。P4からM2では算数科において習熟度別学習やP4でキュピナを導入し、学習場面に応じて、効果的に実施してきた。また、板書がうまく写せない児童や複数の情報を結びつけて解答することが難しい児童には、ロイロノートの写真機能やアンケート機能を活用することで全員参加の授業も展開できた。演習における解説動画は、家庭での復習に役立つ側面が大きかった。また、P4でのキュピナの実践をふまえて、次年度は新たな学習アプリを導入予定。	A	①②③国語科を中心に説明分の系統表を作成。年3回の公開授業で実践した。夏の研修で全教員に周知した。 ②算数科を中心に反転学習の単元を調整し、全学年で取り組みを実施した。指導計画に基づき、2か月に1回の部会で進捗状況報告する会議を開催した。 ③P4からM2では算数科において習熟度別学習やP4でキュピナを導入し、学習場面に応じて、効果的に実施。複数教員が関わる新しいシステムの構築ができた。	・国語科、算数科を問わず、「話す」「聞く」「書く」「読む」の力のレベルアップが必要である。学年ごとに教科学習を通してどんな力を身につけるかを、教員も児童にも意識して主体的な学習をさせるようにしなければならない。次年度は、「下位層がのび、上位層がより深い学びができる」ように学習形態の変化やデジタル教材の有効活用をしていく必要がある。(指導方法の改善)
		② 学習内容の精選	③算数・国語における演習や発展的な場の改善、充実に向け取り組む。ロイロノートやQUBENAの有効活用をする。				
		③ 指導方法の工夫改善					
		④ 評価					
	(3) 道徳・特別活動	① 指導計画の立案	②道徳の指導と評価を充実させるとともに、キャリアパスポートを継続して蓄積する。(キャリアパスポートの蓄積実施の有無)	②について、道徳の年間指導計画をたて、全学年で実施した。道徳の評価については、ポートフォリオを中心に文章表記で整えることが出来た。キャリアパスポートについては、全教員にキャリアパスポートの意義と書き方を資料として配付し、共通理解をはかった。 ④について、どの学年も宿泊学習を行うことができなかったため、宿泊学習におけるキャリア形成能力を身につけさせることができなかった。次年度につながるように、めあて作りや、しおり作り、まとめの発表などを行った。	B	②道徳の年間指導計画を立てることができた。(人権教育の視点を入れて)キャリアパスポートに関して、資料を配付し共通理解をはかった。 ④宿泊学習を実施できなかったが、次年度につながるように、めあて作りや、しおり作り、まとめの発表などを行った。	・特活の充実として、次年度は学級会を系統的に入れていく必要がある。横型シラバスの中に位置づけて、計画的に実施する。 ・宿泊学習をいかしながら、どの学年でどんなことが出来るようになりたいかを明らかにする。
		② 学級活動・学級経営	④宿泊学習におけるキャリア形成能力を身に付ける取り組みを系統的に実践し、キャリアパスポートの蓄積につなぐ。(キャリアパスポートの作成の有無)				
		③ 学校行事					
		④ 児童・生徒会活動の活性化					
	(4) 総合的な学習の時間の指導	① 学習指導計画の立案	③行事(宿泊(校外)学習・縦割り活動等)を中心にキャリア形成能力を身につけ、キャリアパスポートの蓄積につなぐ。(キャリアパスポートの作成の有無)	①新型コロナウイルスの感染状況により学習活動が定まらない状態だったので、学習指導計画の立案は難しい状況であった。 ②③コロナ禍でも実施できる内容に精選し、ハワイや広島とオンラインでつなげて学びを止めないように工夫した。 ④ふり返りを行い、何を学んだのか確認した。全教員でキャリアパスポートの意義を確認し、自分自身の成長をしっかりと振り返りながらキャリアパスポートの蓄積を行うことができた。	A	①②③についてコロナ禍でありながらも、今できる最大限の指導を工夫し、ほとんどの行事を中止せずに実施した。縦割り活動も年間3回実施(昨年度0回)できた。④については全ての活動においてふり返りを行って自身の成長を確かめる機会を設けた。	・コロナが終息する可能性ははっきりしない中で、今までと同じ行事や活動を行っているのは、コロナ前のような児童の成長を見込めない部分が多い。そのため、今までの行事や活動とコロナ禍での実施内容をもとに、各活動で身につける力は何かあるかをしっかりとさせて、学習活動や指導方法をもう一度見直す必要がある。
		② 学習内容の精選					
		③ 指導方法の工夫改善					
		④ 評価					
	(5) 人権教育	① 人権教育指導計画の立案	②「いじめ未然防止プログラム」につながる道徳の授業時数の確保及びカリキュラムの実施に取り組む。	②道徳の授業時数が確保できたことで、指導すべき全内容項目を網羅し、「いじめ未然防止プログラム」につながる内容を重点的に指導できるカリキュラムを全学年で実施できた。 ③指導方法の工夫・改善のために授業板書を写真で撮影して職員が共有できるようにした。板書の充実や指導形態としてロールプレイングができるように教科書の挿絵等をすべてファイリングできた。また、授業の振り返りは、全児童が学びの記録としてワークシートに記入したものに教師がコメントを返すことを継続して行えた。	B	②昨年度以前に比べ、道徳の指導時数の充実が図れており、それにともなってカリキュラムに沿った指導が全学年で実施できた。 ③道徳の研究授業が実施されたり、道徳の指導方法の共有することの必要性が各学年の道徳担当の中で広がったりすることで、16枚の板書写真が集まってきた。また、次年度以降も指導に活用できるように挿絵等のファイリングが準備できた。学びの記録に関しては前年度に引き続き継続して行うことができた。	・授業時数の確保ができたことでカリキュラムに沿った指導の充実が図られるようになったが、指導方法の検討及び充実が必要である。また、学校全体での道徳教育の充実につなげていく仕組みが整えられていない点が今後の大きな課題であり、次年度以降は教員研修も含めて仕組みを整える必要がある。さらに、今年度は道徳通信(いじめ未然防止に関わる内容)を保護者向けに一度だけ発行したが、学校内での取り組みを保護者にもさらに伝えていくことを検討したい。
		② 学習内容の精選	③道徳の授業が教科書(読み物教材)の読み取りに終始しないための方策を検討する。				
		③ 指導方法の工夫改善					
	(6) 生徒指導	① 組織的な生徒指導	①②③④⑤⑥校内体制の確立と実施(校内委員会の開催・情報共有状況、教育相談体制の活用状況、保護者アンケート項目75%以上)	①②③④⑤生徒指導部を中心として毎月の定例会及び臨時委員会を行い、情報の共有及び今後の指導について検討を行った。その結果、登校渋りなど課題を抱える児童に対して学年団を中心に関わり、スクールカウンセラーや専門機関につなげることができた。 ⑥については、いじめの未然防止の為、月に一度の定例会を行った。他にもいじめにつながりそうな事案があった際には臨時委員会を開いた。児童に対しては、全学年で道徳の授業の中でいじめについて考える時間を必ず設けた。併せて外部から講師を招き、より深く考える授業も行った。その結果、年2回実施したアンケートにおいて、学年末の段階で重大案件となるものは1件もなかった。	B	①②③④⑤毎月校内委員会を開催できた。特に①②③については気づきシートを利用しながら、即座に全教員へ情報共有を行えた。 ⑥毎月生徒指導部会を行い、さらに月に一度のいじめ未然防止委員会を開催できた。その中では、年に2回のいじめアンケートについても即日臨時委員会で事象の確認、今後の方針について検討を行った。 ①②③④⑤⑥保護者アンケート「学校はいじめを許さない取り組みや対応を行っている」の項目において、88.5%の肯定的な回答率となった。	・学校での指導について、保護者への啓発頻度が少なかった。次年度は積極的な学校からの発信を行いたい。また、外部講師を招聘し、家庭に対していじめやネットモラルについて啓発を行いたい。 ・全教員が一貫した指導の取り組みに向け、教員対象の研修会の充実を図る。
		② 問題行動の指導					
		③ 教育相談・児童生徒理解	④家庭への啓発・連携(保護者アンケート項目75%以上)				
		④ 家庭との連携	⑥いじめ防止基本方針に沿った対応が行われている。(いじめ対策校内委員会の開催状況、児童のいじめアンケート調査実施後の対応状況、保護者アンケート項目75%以上)				
		⑤ 関係諸機関との連携					
⑥ いじめの問題への取組							
(7) 進路指導	① 組織的な進路指導	①的確な学力把握と保護者への情報提供(保護者アンケート項目75%以上)	①M1・2学年における定期考査の結果等の情報提供と進路指導を計画的に行った。 ③内部進学に関する保護者や児童に向けた中学校教員や中・高生徒による情報提供の場を設けた。児童や保護者が進学への見通しを持つことに効果的であった。新たな基準による内部進学に向けた手続きが、円滑に進むよう日程の調整を行った。	A	①「学校は、児童の学習の様子や定着状況について情報提供を行っている」ことに対して、83%の保護者が肯定的な回答をしている。 ③昨年度までに検討した新たな基準に基づき、中学校とも連携して、より一貫した仕組みとして運用・実施した。小学校から中学校への内部進学率は68%であった。	①的確な学力の把握をした上で、説明の機会を設ける。情報提供の内容もわかりやすく精査して行う。 ③内部進学に向けて、各家庭に対する進路選択に関する情報提供や説明の機会を適切に設ける。また、内部進学に関する基準を全職員間で明確に共有する。	
	② 指導方法の工夫改善	③内部進学の円滑な実施(改訂した内部進学基準の円滑な実施)					
	③ 内部進学						
	④ 家庭との連携						
(8) 特別支援教育	① 組織的な特別支援教育	①②ケース会議での情報共有に加え、リソースルームと学年担当が日常的に情報を交換し、日々の組織的な指導につなぐ。	①②校内委員会やケース会議を随時開催し、教職員間での共通理解・進捗確認を行った。 ③特別支援教育に関する研修会を実施し、今後の指導方法の工夫改善に関わる示唆を受けた。 ④⑤心理や医療など、各方面からの専門的な示唆を受けながら、各家庭とも情報共有・連携をした上で、方向性を明らかに持って個に応じた指導を行うことができた。	A	②各学期の初めと終わりに、個別の指導の工夫が必要な児童の共通理解を行うとともに、毎月の校内委員会において随時進捗を確認した。 ④学校評価アンケートにおける「学校は、児童の学習や生活の様子について相談しやすい」ことに対して、90%の保護者が肯定的な回答をしている。	②③個別に指導の工夫が必要な児童への対応を行う仕組みが定着してきた。今後はリソースルームでの指導方法を全体にも広げること、児童の自立につながる力に高め、日常生活で活かせるようにするため、教員間での連携をさらに密に行う。	
	② 配慮が必要な児童の共通理解	③④リソースルーム担当者や臨床心理士から示唆を受け、家庭とも情報共有を通して連携し、より個に応じた指導を行う。					
	③ 指導方法の工夫改善	⑤ケース会議の方向性を受け、医療機関等との連携を行う。					
	④ 家庭との連携						
	⑤ 関係機関との連携						

学校自己評価書

奈良学園小学校

大項目	中項目	小項目	具体的評価項目及び指標	取組と成果	評価	評価の観点・理由	課題及び改善方策
Ⅱ 学 校 経 営 に 関 す る も の	(1) 組織運営	① 校長のリーダーシップ	②④中期計画による学校経営目標と所属長方針を示し、教科や学年、分掌ごとの重点目標の立案・取り組みにつなぐ。 ④校務分掌や学年等の連携が行いやすいように、主任会や学び委員会等での議論を活かし、調整する。	②④中期計画の事業計画に基づき、各学年や教科、分掌の年間重点取り組みの計画立案につながった。年間を通して、各教科の関連を持たせた指導の場を新しく設け、学びを深めることができた。また、学期ごとに進捗を共有するための場を設けた。	A	②④各学期ごとの進捗管理を行うとともに改善に向けた調整も実施した。保護者アンケート項目「学校は児童に適切な教育活動を行っている」に対して肯定的な回答の割合は98.3%、「学校は児童に分かりやすい授業を行っている」に対して肯定的な割合は94%であった。	・年度末に次年度の重点取り組みについて協議し、小学校全体の方向性を持つことができた。中期計画における重点項目として教員全体で共有し、次年度の各分掌の取り組みにつなぐ。
		② 学校経営目標・方針			A		
		③ 教職員の適正配置と運営への参加意識			A		
		④ 校務分掌等の連携			A		
		⑤ 会議の運営と位置づけ			A		
		⑥ 会議の結果			A		
		⑦ 職場の人間関係			A		
	(2) 研究・研修	① 研修の組織・計画・実施	①②③⑤について年3回全教員による教科研究及び公開授業を実施する。(内1回は小・中・高の交流授業参観ウィーク)及びタブレット有効活用に関する研修会を実施する。	①②③⑤今年度は6月、11月に全教員による各教科研究及び公開授業を実施した。(1月はコロナの影響で中止)中高の先生にも参観して頂き、活用の仕方について意見交換することが出来た。また、ロイロノートをうまく活用することで、各教科児童の学習状況をポートフォリオとして残すことが出来た。 7月には、one to one委員会と共同で、シンキングツール及びクロームブックを活用し、奈良学園型ハイブリット授業の実施。たくさんの先生に意見を発表してもらい、成果を交流できた。	A	①②③⑤全教員による公開授業を年3回実施。(内1回はコロナの影響で中止)中高の先生にも参観していただき、意見交流の場ができた。公開授業の研究テーマとして「論理的思考力の育成」「ICTの有効活用」を掲げ、そこに基づき実施を積み上げられ、年2回の校内研修会を実施できた。	・事後研の充実と単元全体をイメージした授業作りが課題として挙げられる。研究テーマに対して具体的に学年・教科で何を取り組むのかを教科主任と共有することが必要。次年度は、国語算数以外の教科での全体会研究を行い、共通の課題に対して授業作りを行い、模擬授業も実施。事後研の充実を図る。 ・板書方指導案では個人の力のアップを図る。それぞれの教員経験にもよるが、新しい形の提案型授業も入れていく。 ・シラバスを整理し、教科と教科のつながりを見えやすくする中で、探究活動を意識し、深めやすくする。
		② 校内研修			A		
		③ 授業研究			A		
		④ 校外の研修への参加			A		
		⑤ 研修成果の普及			B		
	(3) 安全管理	① 学校安全計画の立案	④危機管理マニュアルを活かした指導の充実(保護者アンケート項目75%以上)	④新型コロナウイルス感染症対策を継続して行うとともに、地震等の災害発生時の危機管理体制も推し進め、自分の身は自分で守る力を児童につける指導の工夫を行った。	A	④幼稚園や中・高等学校とも連携し、避難訓練等を計画、実施した。また、感染症に対しても、適切な状況把握に努めるとともに、児童の安全を第一に考えた対応を行った。「学校は、児童の生命を守るための安全教育に努めている」ことに対して、96%の保護者が肯定的な回答をしている。	・校内に限らず登下校も含め、どのような場面においても児童が自らの命を守る行動がとれる力を付けていくことが、これまでに必要となってきた。感染症を予防しながら過ごす新しい学校生活の習慣を徹底するとともに、避難訓練や安全指導をより充実していく。
		② 学校防災計画の立案			A		
		③ 危機管理体制の整備			A		
		④ 安全指導の工夫改善			A		
		⑤ 家庭との連携			A		
		⑥ 関係機関との連携			A		
	(4) 保健管理	① 学校保健計画の立案	②④教育相談体制の構築(教育相談活用状況)③健康への関心を高め、毎日の健康チェックを通し、自身の健康管理を行う	②保健室入室時の健康相談に加え、学年と今後の方針を検討したい児童について情報共有を行うことができた。 ③毎日の健康チェックを行い、自分の平熱や体調に関心を持たせることができた。手洗いや手指消毒についても積極的に行う姿が見られた。 ④臨床心理士・特別支援教育アドバイザーと連携し、必要な支援について検討し、情報共有を行うことができた。	A	②教育相談の相談依頼数も減少傾向にあり、子どもたちが落ち着いて学習に取り組んでいる様子。臨床心理士とアドバイザーが連携し、個に応じた支援を行うことができている。 ③毎日の健康チェックに加えて、ていねいな手洗いや、手指消毒を進んで行っていた。子どもたち同士で声を掛け合い、感染予防に努めてくれた。	・スマイル教室に通う子どもたちの進捗状況を共有する時間が取れなかったため、来年度は定期的に共有できるようにしたい。 ・コロナ終息の兆しが見えない状況の中で、自身の健康管理を行うことは学校生活をしていく中で必要不可欠といえる。来年度も継続して子どもたちに感染予防の必要性について呼びかけていく。
		② 心のケアや健康相談の体制の整備			A		
		③ 健康観察、健康管理能力の育成			A		
		④ 関係機関との連携			A		
		⑤ 学校給食の衛生管理			A		
	(5) 地域等との連携	① 学校情報の発信	①学校情報の積極的な発信(たより、ブログ、HP発信状況、保護者アンケート項目75%以上) ⑤幼小連携計画立案と実践の蓄積(計画作成の有無と実践の状況) ⑥ならとみアフタースクールの充実	①紙媒体やwebを活用して配布するPMYだよりや学年通信、学級通信、HPを活用したブログやお知らせなど、学校情報の積極的な発信を行った。 ⑤幼稚園から小学校への内部進学について、より充分な情報提供が行える体制を整備した。また、幼小連携計画の見直しを行った。 ⑥ならとみアフタースクールを改編し2年目。多くの児童が活用する状況である。	A	①「学校は、児童の学習の様子や定着状況について情報提供を行っている」ことに対して、81%の保護者が肯定的な回答をしている。 ⑤改編した幼小連携計画だが、防疫対策により実施できない内容があった。 ⑥コロナ禍にあったが、防疫対策を行う中、課外講座受講者が増員した。また、長期休暇中のスクール開講も好評であった。	・学校情報の発信方法は、大きく変容する過渡期となる。情報の種類による適切な発信方法について検討して取り組む。 ・コロナ禍における防疫対策の中、工夫した幼小連携を進める。 ・ならとみアフタースクールと小学校との連携をより密に持ちながら内容の充実を図る。
② 学校(授業)公開		B					
③ 家庭・地域との連携		A					
④ P T Aの活性化		A					
⑤ 校種間連携		A					
⑥ 課外講座等		A					
(6) 施設・設備	① 教育環境の整備	①14年目を迎えた校舎環境の整備	①14年目に入り、修理の必要な箇所を毎月細やかに点検し、修理した。	A	①「学校は、校内の環境整備や美化に努めている」ことに対して、96%の保護者が肯定的な回答をしている。	・学校施設の点検整備は継続して実施する必要がある。校内環境の見直しを、計画的な優先順位をもち進めていく。	
	② 施設設備の有効利用			A			
	③ 施設設備の管理			A			
(7) 情報管理	① 公文書の作成	②個人情報の保護に関する規定に沿った対応	②奈良学園小学校の教職員のみが分かるパスワードを設定し、教職員に周知徹底している。当然ながら、そのパスワードを外部に漏らしたり、他校種の教員に漏らしたりということはないようにしている。	A	②個人情報が含まれるファイルの持ち帰りは原則禁止とした上で、方が一の事態を想定し、個人情報の含まれるファイルには全てパスワードを設定した。	・今年度より教職員一人につき一台のChromebookが貸与された。それに伴い、今までよりもドライブを使用する機会も増え、ファイルの持ち出しを気軽にできるようになった。便利な反面、個人情報の保護の啓発を定期的に行っていく。	
	② 個人情報の管理・保護			A			
(8) 児童募集・広報	① 広報活動の充実	①②個別見学会を毎月実施する。 ①②学校説明会・体験授業を定期的に実施する。 ①②YouTube広告やSNSを効果的に活用して本校の認知度をさらに高める。	①②12月までで合計57組の個別見学会を実施。学校説明会に関しては、学校主催分は計画通りに実施するとともに、今年度新たに幼児教室主催の学校訪問会を4件実施。新規少人数イベントとして「プログラミング体験」「親子体作り教室」を実施。また、現PP3に対して「小学校体験ツアー」を計5回実施。YouTube動画広告及び検索連動型広告(リスティング広告)を継続して実施。それらからランディングページへ誘導し、本校イベントに参加申込みをいただく流れを構築。	A	①②奈良学園幼稚園からの内部進学者は30名となり、昨年度と比較して、内部進学者数11名増、内部進学率が8%増の57%という結果となった。また、A・B・C日程合計の志願者数は49名(昨年度40名)、受験者数は47名(昨年度38名)となり、昨年度比増という結果となった。	・内部進学に関しては、今年度は年長児の在籍人数が多かったという要因はあるものの、内部進学率が上昇したということから、取組において一定の成果が見られたと考える。一般受験に関しては、昨年度より増加はしたものの、以前と比較すると受験者数はまだ少ない。次年度は今年度の取組をベースにさらに成果が表れるように計画を練っていく。	
	② 志願者数増の取組			B			